ふふふ
fu fu fu 幸せを感じたとき・・・

信楽通信　第239号　2022. 6. 28発行

社会福祉法人しがらき会
《法人事務局》信楽青年寮内
TEL0748-82-0588　FAX0748-82-0961
URL http://www.shigarakikai.or.jp　E-Mail shigaraki@miracle.ocn.ne.jp

信楽青年寮
ワークセンター紫香楽
しがらき地域生活支援センター
障がい者雇用・生活支援センター（甲賀）

社会福祉法人しがらき会『実践報告会』

令和４年３月１９日（土）曜日に社会福祉法人しがらき会の「実践報告会」を行いました。この報告会の目的は、日々の実践を振り返り、改めて見直す機会を持ち、そうした事を整理し検証した上で支援を記録として残す事、さらに残したものを次の実践に活用する、繋げることにより質の高いサービスを提供できる職員集団・組織作りとなることです。今回、過去の報告会から出てきた課題の一つである「高齢障がい者支援について」と題して各事業所が日々の支援の報告を行いました。例年であれば法人職員が一同に会して行っていましたが、今回はコロナウィルス感染の観点から各事業者の報告はＺＯＯＭを利用し会場を分散した形で行いました。報告の内容は次のようになりました。

①ワークセンター紫香楽

高齢障がい者の支援について

・ワークセンター紫香楽の利用者状況
・サロン活動の取り組み
・個別の事例から（Ｕ・Ｔ・Ｍ・Ｎさんの事例）

②甲賀地域働き・暮らし応援センター

就労支援における『知る』『つなげる』『拡げる』さまざまな障害を持つ方の就労支援の意思決定

・『本人の働きたい気持ち』を応援する就労支援の事例紹介

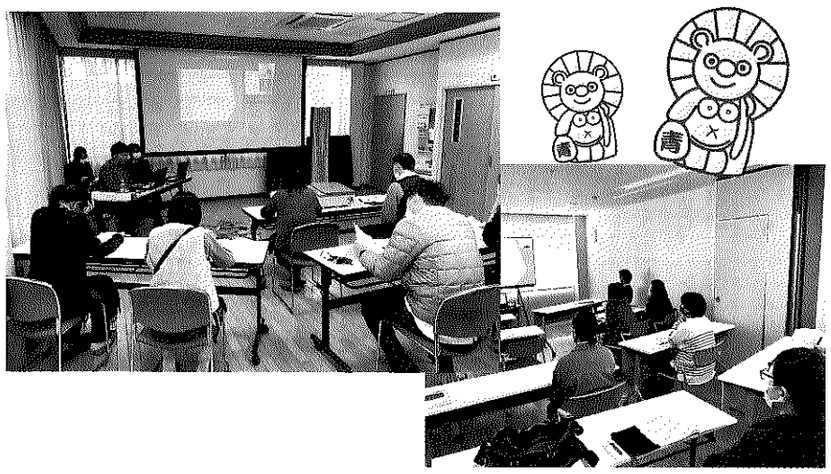
③しがらき地域生活支援センター

『どうしたらええねん!?』～Ｈさんと支援者の葛藤ヒストリー～

④信楽青年寮

よりよい余生、暮らしを支える

・個別の事例から（Ｙ・Ｎ・Ｓさんの事例）



慣れないＺＯＯＭ報告ではありましたが、「高齢障がい者の支援」について、生活を維持していくために必要な医療、介護の支援が年々増えてきている現状の中で、大前提にある利用者さんの意思決定を重んじ向き合う支援者の葛藤等が主な内容になりました。

例えば、信楽青年寮では、人生のほとんどを信楽で暮らされ長きに渡り地域就労も経験された方の事例で体の疾患などを理由に職場を退職。しかし、ご本人は「働きたい」という思いとよりよい余生をここ信楽の地でご本人の思いをどのように支えていくかが発表されました。

今後も様々な問題、課題事例が出てくるのは言うまでもありません。法人職員一人ひとりが利用者さんに向き合うこと。そして、どのように関わればいいのか？日々「試行錯誤」し自らのスキルアップに繋げられるよう鍛錬することの大切さと姿勢をこの報告会を通じて改めて感じました。（平井・髙橋　記）

信楽青年寮　だより

未だに終息の目途が立たない、新型コロナウイルスの脅威ですが、国内で最初に報道されたのがいつであったか、皆さん憶えておられますか？

私も曖昧な記憶であったため、一度調べてみたところ、二〇一九年十二月三十一日との事でした。当初は原因不明の肺炎として、中国の武漢市の話題が中心であったと記憶していますが、あれから二年半、まさか未だにウイルス感染が終息していないとは、当初夢にも思わなかったのは皆さんも同じではないでしょうか？

この間、信楽青年寮でも様々な面で感染対策を施し、感染防止に努めてきました。その効果もあってか、幸いにも今日まで利用者さんの感染事例は一例もなく、皆さんが日々元気に過ごしていただけている事を有難く感じています。

ただ、こうした感染防止対策の裏には、利用者の皆さんにも様々な制限や我慢をお願いしてきている事は言うまでもありません。試行錯誤を繰り返しながら、可能な限りの楽しみを提供できるよう、日々努力はしていますが、施設という限られた環境下で過ごされている利用者の皆さんの心労は計り知れません…。

中でも、前任者の努力と、地域の皆様のご理解もあって、当たり前のように行ってきていた、週末の平和堂への買い物や喫茶店での茶話会、地域のイベントへの参加、地域住民を施設へ招いての交流事業等、「人として、地域の中で当たり前に暮らす」という貴重な機会と地域との繋がりを、施設側が一旦閉ざさざるを得ない状況となった事には、職員も悔しさともどかしさを感じながら、日々の支援を行っています。

利用者の皆さんにとっても、地域との繋がり、地域での暮らしというものは、非常に重要な位置づけで、大きな楽しみでもあります。

「いつになればまた買い物に行けるの？」「納涼盆踊りには地域の人も来るの？」と、皆さんも以前の暮らしを心待ちにされています。

ここ数年は、地域の中でも様々な活動が自粛されてきましたが、感染対策は施しながらも、今年は駅前の陶器市や陶芸の森での作家市も盛大に開催され、徐々にではあるものの、地域内にも活気が戻ってきたように感じています。

施設という閉鎖空間内での感染拡大（クラスター）は、想像を絶する被害や心労を伴う事から、まだまだ気軽に地域へ出てという状況ではありませんが、また少しずつ繋がりを取り戻せるよう、地域の皆様のご理解、ご協力を賜り、状況が緩和された際には、暖かく迎え入れてくださるようお願いします。

（梅原　記）

ART

大杉和夫個展『竹』

四月十六日（土）～二十四日（日）まで信楽商店街の一画にあります「ＦＵＪＩＫＩ」において、当施設利用者の大杉和夫さんが個展を開きました。

大杉和夫さんは、長く信楽の陶器事業所に就労され、そこで習得された技術などを基に信楽青年寮の作業場において陶器作品の制作を続けてこられました。ここ数年は、絵画制作にも取り組み、国内外の展覧会や公募展、外部団体への作品提供など積極的な活動を展開されています。かねてから自分の個展を開催したいという強い希望を持っておられ、その想いが今回、信楽の街中で実現したことは、ご本人、また信楽青年寮にとっても大変意義のあることであったと感じています。現在は、コロナ禍でイベントを行うにも非常に難しい時期であり、会期は十日あまりと限られた時間の中ではありましたが、人づてにお声がけくださったり、本人や施設にゆかりのある人たちがこの機会に集っていただけたりと作品鑑賞だけではない「展覧会の意味」を感じられたと思います。

ご協力いただきました地域の皆様には大変感謝申し上げます。今後とも当法人ならびに信楽青年寮の諸活動にご理解、ご協力をお願いいたします。

（石野　記）

スタッフ募集（正規・パート）

しがらき会では職員を募集しております。

障がいのある人を支える仕事に興味がある方は、
下記までご連絡をお願いします。
お待ちしております。
詳しくはQRコードを読み取って下さい!!

募集職種　：支援員・ヘルパー・看護師・世話人
就業支援ワーカー・洗濯業務

連絡先：しがらき会法人事務局
0748-82-0588
担当：中井・岩永

ワークセンター紫香楽より こんにちは

ワークセンター紫香楽では、作業の一つとして町内外の空き缶の回収、空き缶つぶし、買い取ってもらう納品を行っています。空き缶つぶし作業は機械に投入して数人で流れ作業をする方々と、マイペースに足で一つ一つ踏んでつぶす方々と二通りの方法でしています。缶がつぶれることは障がいのある方々にとっては視覚的、感覚的にわかりやすい作業なので、地域の方々から空き缶を絶えず提供して頂けていることは大変ありがたいことです。

空き缶の回収につきましては、ヴィラ作業場に空き缶回収ボックスを設置し、いつでも空き缶を入れて頂けるようにしています。ご家庭で空き缶がありましたら、是非ワークセンターの空き缶回収にご協力の程よろしくお願い致します。神山のワークセンター紫香楽本館でも、空き缶の受け取りを行っておりますので、お近くの方へお持ちください。

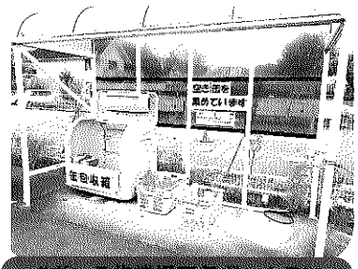
（杉本貴　記）

＜缶分別＞

＜缶潰し＞

≪缶潰し≫

≪神山ワークセンター回収ボックス≫


≪ヴィラ作業場回収ボックス≫

しがらき地域生活支援センター だより

日頃より、当支援センター活動に格別のご理解とご協力をいただき誠にありがとうございます。

さて、しがらき地域生活支援センターは、障がいのある方が希望する地域生活の実現を推進する観点から、今年度もセンター事業の軸にグループホーム事業を置き、居宅介護等支援事業、相談支援事業の二事業を併設した形で一体的に運営することでワンストップサービス事業所として地域生活の安心をつくっていきます。

グループホームの利用者数は、六十八名（十九歳から八十六歳まで）、居宅介護等登録者は百二十三名、相談支援事業登録者数は百六十八名がご利用されています。昨年度は、特に新型コロナウイルス感染防止対策からの「新しい生活様式」の影響で日常生活に窮屈に感じる人、逆にストレスが軽減された人、それぞれ多様な思いがあることに気づかされました。

改めて、その人なりの暮らしができるよう今年度は、ひとり一人の思いや願いを聴き取り、その声を大切にしながら相談支援事業、ショートステイ、居宅介護等事業と連動しながら、それぞれの新たな日常から暮らしの構築をしていきたいと思います。

今後もご本人、ご家族、地域の皆様から信頼され、愛される支援センターでいられるように職員、キーパー一同努力して参ります。何卒、より一層のご指導、ご鞭撻、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

（植田　記）

≪しがらき地域生活支援センター≫

≪うろむろ（相談支援事業所）・HALU（グループホーム）

障がい者雇用・生活支援センター（甲賀）だより

甲賀働き・暮らし応援センターは、障害者の職業生活の自立を目的として、障害者の住む地域で職業面と生活面の両方における一体的な支援を行っています。

今回、平成二十八年、甲賀市より委託を受け実施しています就労準備支援事業について紹介させていただきます。

就労準備支援事業は『社会、就労への第一歩』と言え、「社会に出ることに不安である」「他人と上手くコミュニケーションできない」といった理由ですぐに職に就くことが難しいものの支援により就労が見込まれる方に、一年を目処にプログラムに沿って就労に向けたサポートや就労機会の提供を行います。

対象は主に二十歳から六十歳までの生活に困窮している方で、ひきこもり状態、高齢の親との同居、親亡き後一人で生活している方などです。支援を行うことにより障害に気づき、手帳を取得して就労された方もおられます。

プログラムは、日常生活に関する支援、社会自立に関する支援、就労自立に関する支援の三段階で、就労への準備としての基礎能力の形成を計画的、一貫して支援しています。具体的には就労スキルの習得、ボランティア等の社会参加、企業での就労体験などです。

就労準備支援の最終段階である就労自立支援では、企業での就労体験がとても重要だと考えています。企業で体験することは自分を知る大きな機会であり、何を求められ、何が必要なのかを、働くことを通して感じ、学ぶことができます。就労体験を行うことで働くことへの思いが確かになり、働いて収入を得たいと前向きになられます。このように企業での就労体験は自立への大きな一歩になっています。

しかし、年齢や生活状況がさまざまなため、企業での就労体験の場を見出し、体験することは容易ではないのが現状です。

就労体験として三～十日程度の期間、簡単な仕事をご提供していただけませんでしょうか。体験中の保険加入やご協力いただいた事業所様に心ばかりですが謝金をお支払いさせていただきます。コロナ禍等、社会状況が厳しい時ではありますが、何卒ご理解の上、就労体験の場や見学の場を提供していただけましたら幸甚です。また、地域にご協力いただける方や企業様がおられましたらご連絡いただけると幸いです。

今後とも地域の皆様、企業の方々のご理解とご協力をいただきますよう切にお願いいたします。（小山　記）

甲賀地域働き・暮らし応援センター
☎：0748（63）5830

職員コラム

私事ではありますが、この四月に子供の就職が決まり親元から旅立ちました。高校を卒業して、一人暮らしをしながら、学生生活を送っていました。学生の頃はまだ親としての責任感や張り合いがありました。親元にいないことは同じですが、親の手が離れたことへの想いは学生の頃とは違い、寂しさが強くなっています。私の中で子育てが生きがいになっていたことを思い知らされています。そんな私のことを心配して趣味を持つことを子供に薦められています。生意気に親の心配をするようになってくれたことが寂しくもあり、嬉しくもあります。

リビングに無造作に紙袋がありました。母の日に子供が用意してくれたプレゼントでした。初任給で買ってくれた水筒です。毎日仕事に持ってきて自分を励ましながら、あまり心配をかけないで毎日笑っていられるように暮らしたいと思っています。（I・M）

ダブルクリック（私の視点）

私が支援の中で大切にしているところは、利用者さんとのやり取りです。利用者さんから相談を受けた時、交渉が必要な時、不適切な行為があった時など利用者さんとやり取りする場面は沢山あります。場面によって、人によってどのように接するのか全然違うのだと日々感じています。相談を受けた際には本当に困っていて手助けを求めているのはどこなのかを探っています。交渉する際には押し付けるでもなく、全て受けるのでもなく、折り合いの付くところを探ることが必要になります。不適切は行為があった際にはそれがどういうことなのか、どんなことになるのか利用者さんに伝わるよう考えながら話します。丁寧な言葉遣いや沢山の文字が必ずしも利用者さんに伝わるわけではなく、この人にはどんな方法、言葉が伝わりやすいのかということを意識しています。利用者さんとのやり取りでは信頼関係が大切、しかし近すぎると主観が入ってしまうため、適度な距離感が必要だと思います。関係性ができている中であれば、支援者の本気度は利用者さんにも伝わると信じています。人と人とのやり取りができる、違いがある、そんなところに支援者としてのおもしろさを感じています。（S・K）